ふしぎな日本語

李寧熙（イヨンヒ）

文藝春秋

© Young-hee Lee 1992
Printed in Japan

版権代行・編集協力
(有)ペン・エンタープライズ

フシギな日本語

一九九二年四月一日発行　第一刷

著者　李寧熙（イヨンヒ）

発行者　豊田健次

発行所　株式会社文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）三二六五―一二一一

印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします
定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-16-346290-2

フシギな日本語

装幀　坂田政則
カット　大竹雄介

目次

はじめに　宝石をちりばめたことばのお城へ　7
お袋(ふくろ)さん　13
いざや、いざや　29
かっぽれ、かっぽれ　49
泥棒(どろぼう)と掏摸(すり)　71

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

醜女(ぶす) 85
鳥肉(かしわ) 93
わっしょい、わっしょい 103
白馬(あを) 113
紙縒(こよ)り 125
嬰児(みどりご) 133
桑原(くわばら)、くわばら 145

たたき　153
小百合（さゆり）　165
明日香（あすか）と飛鳥（あすか）　189
百済（くだら）と新羅（しらぎ）　201
事瑕（ことさか）　209
童男（をぐな）　221

はじめに　宝石をちりばめたことばのお城へ

「お母さん。これ、日本語でなんと読むのか知ってる？」

日本語を習っている娘が、「加特力」と書いた紙切れをヒラヒラさせながら笑っています。

「かとくりょく。それなんのこと？　加速力と違うの？」

「カトリックと読ませるの、これで」

「まさか！」

「字引にちゃんと出てるわよ。じゃ、これは？」

今度は「三鞭酒」と書かれた紙切れです。

「さんべんしゅ？」

「残念でした。シャンペンって読むのよ。さんべんだなんて聞こえが悪い」

「それはそうね」

私たちは思わず吹き出しました。

さんべん。

発音によっては変なものに思われかねません。

「お次はこれです」

「混凝土」の三字が眼前につきつけられました。

「これも外来語？　こんぎょうど……はて、混ぜてかたまる土だと？　あ、分かった分かった！　コンクリートですな」

「セイカイ！」

「でも、よくあて字されてるものね！　混凝土と書いてコンクリートと読ませるなんて。実にセンスが良い」

私はつくづく感心しながら、『用字総覧』（池田書店）なるその字引きの「漢字表記の外来語」ページに見入りました。

「洋墨（インキ）」「温突（オンドル）」「金平糖（コンペイトウ）」「鬱金香（チューリップ）」「麦酒（ビール）」「天鵞絨（ビロード）」「鍼力（ブリキ）」「鈕（ボタン）」「莫大小（メリヤス）」「亜米利加（アメリカ）」「亜爾然丁（アルゼンチン）」「浦塩斯徳（ウラジオストック）」「牛津（オックスフォード）」「桑港（サンフランシスコ）」「羅馬（ローマ）」……。

要するに、これらは「新・万葉仮名」です。七・八世紀の日本で、古代韓国語を「日本式読み方の漢字の音・訓から生じる音声を借りて」書きあらわしていたように、

近代の日本に押し寄せた外来文化語を、「日本式漢字の音・訓から生じる音声を借りて」書きあらわしているのです。

「浦塩斯徳」が、その典型的なものといえるでしょう。

「浦」「塩」は、訓読みを借りて表記したケース。

「斯」「徳」は、類似音の音読みを借りて表記したケース。

このように、音・訓交ぜて書きあらわす、いわゆる「重箱読み」または「湯桶読み」。これこそ、上代日本の「万葉仮名」の書き方であり、古代韓国の「吏読」（古代韓国語を韓国式漢字の音・訓から生じる音声を借りて表記した古代借字文）の表記法です。

特に注目すべき点は、「浦」という字を選び用いることによって、ウラジオストックが「港」である事実まで暗示しているくだりです。

万葉仮名もまったく同じ書かれ方をされていました。

字義に関係なく、漢字を「表音文字」として用いたものの、なるべくそれが意味する概念にふさわしい文字を選び取った……したがって、使われている漢字のカタマリをいちべつしただけでも、あるていどその語句や文章や歌の意味するところが分かる……という仕組み。非常に親切な書かれ方であるといえるでしょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

しかし、この親切さが災いして『万葉集』や『日本書紀』『古事記』『風土記』の万葉仮名表記部分の解読は、大いなる誤訳の泥沼におとされる破目になったのです。「莫大小」。便宜上、これを八世紀に書かれた歌の中の語句と仮定して、この誤訳の過程を復元してみましょう。

ある万葉歌の中に、「莫大小」という語が出てきたとします。

歌の作者は、あくまで「メリヤス」のことを表記したのですが、後代の学者は、何をあらわすものかまったく分からず、これを漢文風に「大小とする莫れ」などと読んでしまいます。これで、歌意はもう完全に支離滅裂となり、フワフワ、モヤモヤのお化けの訓み下しが出現することになるわけです。

メリヤス物には伸縮性があります。「大きい人」にも「小さい人」にも良い加減サイズが合う。それで「大きい、小さいなどと心配する莫れ」の意まで含めて、「メリヤス」を表記するにあたり、「莫大小」という類似音でもある漢字を選んだ。これがことの真相なのですが、学者先生方は、決してそうお考えにならない。

「莫大小が外国語のメリヤスだなんてコジツケも甚だしい。なるほど莫はマクともメとも読める。小もスと読んで無理はないだろう。しかし大はどうだ。どう見てもリヤ

とは読めないではないか。何が類似音か。馬鹿馬鹿しい。わしらは一生苦労に苦労を重ねて万葉仮名を研究してきたんだ！」

と、「莫大小」を「メリヤス」と正しく訓んだ者に対してカンカンにお怒りになるわけです。

ほかのことばについても大同小異です。「桑港（サンフランシスコ）」「羅馬（ローマ）」「亜米利加（アメリカ）」……。

これらが八世紀の文献に登場することばだと仮定してみましょう。学界はさぞかし大真面目で、字義を中心に定義を下すことになります。

「桑港（サンフランシスコ）は桑がしきりに植えられていた港と思われる」とか、「羅馬（ローマ）には馬がたくさん飼われていたのであろう」または「羅馬はもともとらばを意味したものか」とか、「亜米利加（アメリカ）」は「亜細亜（アジア）にコメを売りつけて利を加える国だからか」など、ギャグとしか思われないような、とてつもない推定が乱れとぶことになるのです。

韓国語であるものを遮二無二日本語で読もうとする、また韓国語を漢字にあてはめて表記したものを、その漢字の義で解こうとする。そこから「誤訳」は定着する。しかし、なんだかしっくりしない。

得体の知れない日本語の数々は、このような事情の中から生まれ落ちてきました。

なぜそう呼ばれるのか、分かっているようで分かっていないことば。たとえば、「おふくろ」「くわばら、くわばら」「どろぼう」など。

意味不明のことば。たとえば、踊りの歌ことばの「かっぽれ、かっぽれ、あまちゃでかっぽれ」など。

そして、音でも訓でもないまったく異相の読み方で呼ばれる漢字語。たとえば、「飛鳥(あすか)」「白馬(あをうま)」「紙縒(こよ)り」など。

日本語には、フシギなことばが晴れた夜空の星ほどもあるのです。これはいったい何をあらわす、何語なのでしょうか。結論として、ただ一言申し上げましょう。日本語としてどうにも解けないことばは、一応、韓国語ではないかとうたがってごらんになって下さい。

この「疑い」は、まさに魔女の杖の一振り。魔法の霧がするすると消え去り、宝石をちりばめたことばのお城がこつぜんとあらわれてきます。

この本は、読者の皆様をそのお城にご案内するガイド・ブックです。

一九九二年一月

李寧熙(イヨンヒ)

お袋さん

お袋さん

「お袋」は、ただの母ではない。
「懐かしき母」なのである。

母親のこと、なぜ「おふくろ」というのでしょう。
私たちが「お袋」ということばを口にするとき、甘い懐かしさが伴います。
それはまたなぜでしょう。
「お袋」というのは、母親に対し、面と向かっていうことばではありません。
相対していうときは、「お母さん」「母上」、幼児語で「ママ」です。
「昔、お袋がね……」
そう、「お袋」というのは、母親を思い浮かべて口にすることばなのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong